



British Trad Review No.3

Editorial

第2号のこの欄で、OAKを隔月に発行するなどと書いておきながら、第3号の発行は結局4ヶ月後になってしまいました。第2号を手にした後、次の号の発行を首を長くして待っていた多数の(?)読者の方々には、大変申し分けありませんでした。昨年暮れ以来、

筆者らのやむを得ない事情により、どうしても編集の方に手が回らず、この様なことになりましたが、以後は出来る限り短いインターバルで発行してゆきたいと思っておりますので、どうか御期待下さい。

26th Feb. '78 Y. MORRI

NEWS

(担当：遠藤 斗志也)

・昨年12月に行なわれたバンドッグス (Bandogs—ビート&ワリス・コウ、ニック・ジョーンズ、トニー・ローズ)の一連の公演は、音楽的には確かに成功したが、同時に幾つかの問題点も残しつつ終了した。即ち、動員し得た聴衆の数は予想をかなり下回り、その結果として経済的な面でかなり苦しい公演旅行になったということである。メンバーの一人、トニー・ローズはメロディ・メイカー紙に次の様に語っている。「今は少し休みをとって、もう一度良く考えてみたい。次に演るときは多分かなり違った形になると思う。私たちは多くの事を今回学んだ、でも十分に楽しかった。誰も今回の事を後悔してはいないよ。」

彼らは1月中にバンドとしてのレコーディングを開始する予定である。

・シャーリー&ドリー・コリンズが再び活動を開始し、現在フォー・クラブに出演中である。

・トランスアトランティック・レーベルを離れて以来レコーディング活動を休止していたリチャード・ダイジェンス (Richard Digance)は、このほどワリサリスと契約、秘蔵後集1弾のシングルとして“Earls A Winger”をリリースした。これは数週間前に発売されたエルキー・ブルックス (Elkie Brooks)のシングル“Pearl's A Singer”のパロディらしい。なお、リチャード・ダイジェンスはエルキーとの公演旅行を終了したばかりである。

・ステイライ・スパンはこの春のコンサートでライブを録った後、解散するそうだ。詳細は不明。

・ディヴ・パーランド、ディック・ゴーガン、トニー・キャプスティックの3人は、イワン・マッコールの曲を集めたアルバムを共同制作する。レコード・レーベルはラバー (Rubber)。



JOHN KIRKPATRICK: to make a solo album of his own material.

・ジョン・カーキパトリックの次のアルバムは純て彼のオリジナルで占められるらしい。彼はこれ迄も、時々自分の曲をレコーディングしてきたが、全曲自作のアルバムは今回が初めてである。「今まで沢山の曲を作ってきた訳ではないが、一向アルバムを作るのには十分な曲数が溜ったと思う。今回のアルバム制作には若干神経質になっているけれど、同時に又、面白い。」と彼は語っている。

・全英公演を終えたばかりのファイヴ・ハンド・リールは新年早々、サード・アルバムのレコーディングに入った。今までの2枚はプロデュースがジェフ・ヘスロップだったが、今回はサイモン・ニコルが起用されたということだ。

・OAK前号で御知らせしたニュー・ヘッジホッグ・パイのアルバムは、ラバー・レーベルより2月中に発売される。タイトルは多分“Just Act Normal”となる。

・ライアム・ワランシーとトミー・メイカムのダブルリン、ゲイアティ・シアターに於けるライブ・レコーディングは、2枚組アルバムとして近く発売される。プロデュースはアーチャー・フィッシャー。



・日本でも人気の高いフランキー・アームストロング、去年は結局アルバムを発表しなかったが、伝えられる所では、今までのトラッドというカテゴリーを越えて新たな音楽の方向性を探っているらしい。

もともと彼女は、トラディショナル・ソングを歌う一方、医療関係の社会奉仕労働に従事している事からも伺える様に、音楽との関わりの中に、トラッド・シンガーの中でも最も鋭い視点を持ち続けてきた一人だった。例えば彼女の場合、歌と、歌が生み出され歌い継がれてきた社会の構造とを関係付ける事を重視し、その作業の中で今それらを歌うことの意味を明らかにしようとしてきている。また、一方では現代の歌に対して非常な興味を示している。従って彼女について語る時、僕たちはこれ迄のレコードに於ける彼女の選曲の意図、そしてまた John Pole の“Jack The Lad (歌っている内容を吟味されたい)”を歌う事の意味等を無視してはならないのである。

さて、そうした彼女がヘンリー・カウ、マイク・ウェストブルック・ビッグ・バンドのメンバー達と共に“Moving Left Revue '77” (共産党集会)に出演したというニュースが伝えられたのは、去年の春の事である。ヘンリー・カウといえは英国でも最も左寄りのグループとして有名であるが、フランキー・アームストロングと彼らの結びつきは興味深い。これを機に彼女はジャズ系のミュージシャンにも接近し、最近ではケン・ハイダーの“Land of Stone” (Japo 60018) というアルバムに参加している。もっともこの“前衛ジャズ”のアルバムに於ける彼女は、ケン・ハイダーのコンセプトに従ってひたすら言葉なき声を発するだけで、必ずしも面白いとはいえないが……。

いずれにせよ、彼女の今後の動向は、ニック・ジョーンズらによってトラッドも音楽的に質を変えようとしている時だけに、注目されるどころだろう。



HENRY COW with MIKE WESTBROOK'S BIG BAND and FRANKIE ARMSTRONG: joining together for London concert.

BOOKS

“English, Welsh, Scottish & Irish Fiddle Tunes”

by Robin Williamson

元インクワイアブル・ストリング・バンドのロビン・ウィリアムスンが、約100曲もの有名なフィドル・チューンを選び、それに解説を加えた楽譜集です。その解説もかなり詳しく、参考レコードなども紹介しています。もちろんフィドル以外の楽器でも演奏できますし、ギター・コードも付いています。うれしいことにこの本には、彼のフィドルによるソノシート（13曲）が付いています。曲によって、ギター、マンドリン、ベースなどのパツリが付きませんが、なんといってもすごいのは彼のフィドルで、実に土臭く、真にフィドルという感じで、ディヴ・スウォーブリックとはまた違った魅力を持っています。このソノシートを聴くだけでも十分価値があり、楽器がでる、できないにかかわらず、トラッド・ファンなら持っていたい本です。ぜひ彼に、このようなフィドルのアルバムを出してもらいたいものです。



また彼は77年の春に、Robin Williamson & his Merry Band という名で “Journey's Edge” (Flying Fish 033) というすばらしいアルバムを出しました。リズム・セクションを除いてすべてアコースティックでオリジナルではありますが、ケルティック・トラッド風の曲も収められています。(藤 七)

“A Little Music”

selected and compiled by Ashley Hutchings

A collection of folk song, instrumental tunes and dances

ブリティッシュ・フォーク界の巨人、アシュリー・ハッチングスの偉大なる歴史 — フェアポート・ヘスティライ〜アルピオン・カントリー・B〜エッチングム・スティーム・B〜アルピオン・ダンス・B — を楽譜でつづった本。ロックの楽譜集にありがちな出版社の独断的なものではなく、製作はアシュリーとサイモン・ニコルなどの友人達の協力によってなされています。

未発表写真や彼自身の解説に於ける逸話などは非常におもしろく、また本としての美的センスも良く、レコード同様、さすがアシュリー、とファンをうならせます。(写真は、72年春、アルピオン・カントリー・バンド。左から、スティーヴ・アシュリー、サイモン・ニコル、ロイストン・ウッド、スー・ドラハイム、デイヴ・マタックス、アシュリー・ハッチングス。)



BALLADS

"Annan Water" (Child NO.215 APPENDIX)

as sung by Nick Jones
in his album "Ballads and Songs" Trailer LER 2014

O Annan Water's wondrous deep,
And my love Annie's wondrous bonny,
I'm loath that she should wet her feet,
Because I love her best of any.

Go saddle to me the bonny grey mare,
Go saddle the sune, and make her ready,
For I must cross that river tonight,
And all to see my bonny lady.

* And woe betide you, Annan Water,
At nights you are a gloomy river!
And over you I'll build a bridge,
That never more true-love may sever.

And he has ridden o'er field and fell,
O'er moor and moss, and many a mire,
His spurs of steel were sore to bide,
And from the mare's feet flew the fire.

The mare flew on o'er moor and moss,
And when she'd wan the Annan Water,
She couldn't have ridden a furlong more,
Had a thousand whips been laid upon her.

* REFRAIN

O boatman, come put off your boat!
Put off your boat for gowden money!
For I must cross that stream tonight,
Or never more I'll see my Annie.

The sides are steep, the water's deep,
From bank to brae the water's pouring,
And you bonny grey mare she sweats for fear,
She stands to hear the water roaring.

* REFRAIN

1. アナン川はとても深く
僕の恋人アニーはとても美しい
彼女が足を濡らすなんて、僕は嫌だ
誰よりも愛しているのだから
2. 美しい灰色の馬に鞍をつけなさい
元気な馬に鞍をつけて用意させなさい
僕は今夜、美しい恋人に会いに
あの川を渡らねばならないのだから
3. アナン川よ、災いあれ！
夜になるとお前は荒れ狂う
お前の上に橋を渡そう
恋人たちがもう決して別れることのないように
4. 彼は野や丘、高原や沼地
そして幾多のぬかるみを馬で越えた
彼の鉄の拍車から受ける痛みは耐え難く
馬の蹄からは火花が散った
5. 馬は高原や沼地を飛びように走った
だがアナン川の岸辺に辿り着いた時には
たとえ、千のむちがあてられようと
1ファーロン*も走ることができなかった
* 1/8マイル
6. 3.の繰り返し
7. 船賃しよ、船を出しておくれ
金貨で私から船を出しておくれ
僕は今夜、この川を渡らねばならないのだから
さもないともう、二度とアニーに会えないの
だから
8. 両岸は険しく水は深い
岸から土手に水流は押し寄せた
美しい灰色の馬は恐れのおまり汗して
木のうなりを聞きながら立ちすくんだ
9. 3.の繰り返し



And he has tried to swim that stream,
And he swam on both strong and steady,
But the river was broad, and strength did fail,
And he never saw his bonny lady.

O woe betide the willow wand,
And woe betide the bush of briar!
For it broke beneath he true-love's hands,
When strength did fail, and limbs did tire.

* REFRAIN

10. 彼は川を渡ろうと泳いだ
そして力強く、まっすくに泳ぎ続けた
だが川幅は広く、彼の力は衰えた
そして二度と美しい恋人を見ることはなかった

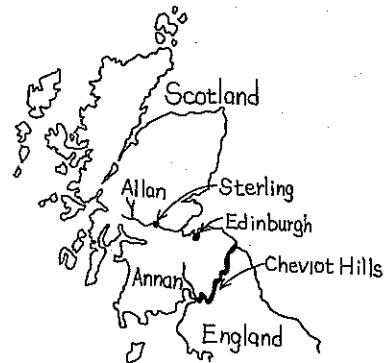
11. やなぎの枝よ、災いあれ！
いばらの蔦よ、災いあれ！
彼女の恋人が力衰え、手足が疲れ果てた時
それは彼の手の中で折れてしまったのだから

12. 3.の繰り返し



《解説》
起源—Annan川とAllan川

Annan川はスコットランド南部からスコットランドの西境のSalway河口に至るまで南北に走る川であり、Allan川は、中部スコットの湖沼地帯を西から東に流れる大きな川。River Forthの交流で、Sterlingで北からファウスに合流しています。両者ともスコットランドの川で、またそれぞれが各自の名を冠したバラッドを持っています。〈アナン川〉は、1802年、及び1833年出版のWalter Scott編くMinstrelsy of the Scottish Border—スコットランド国境地方の詩歌〉に採録され、チャイルド・バラッドでは4巻No 215の付録に見出されます。ニッリ・ジョーンズは14連から成るこのバージョンを元に、やや省略、簡素化して歌っています。スコットはこのバラッドを口碑から文字にしたわけですが、これに約1世紀ほど先だつ17世紀末に、エジンバラで、また1729年ダブリンで、〈アラン川〉というバラッドが歌集に収められています。アナン川は古く



から悲劇的な事故—つまり溺死—の多い所であり(スコット)またアナン川は同名バラッドが出版されたエジンバラに地理的に近いという事実をそれぞれ有しているわけで、正当な起源を突き止めるのは困難でしょう。しかしバラッドの知名度は、その起源の古さではなく、伝承能力によるものですから、現在このバラッドは、主人公の恋人の名、アニーとの語呂が合うアナン川の方に帰属していると言えましょう。

(7ページへつづく)

SONGS

"Rattlin', roarin' Willie"

as sung by Dick Gaughan
in his album "No More Forever" Trailer LER 2073

O, rattlin', roarin' Willie,
And he held tae the fair,
For to sell his fiddle,
An' buy some other ware;
But partin' wi' his fiddle,
The saut tear blint his ee,
Rattlin', roarin' Willie,
Ye're welcome hame to me!

As I cam by crochallan,
I cannily keekit ben,
Rattlin', roarin' Willie,
Was sitting at yon board-en',
A-sitting at yon board-en',
Ameng guid companie;
Rattlin', roarin' Willie,
Ye're welcome hame to me!

"It's Willie, come sell your fiddle
Come sell your fiddle sae fine;
Willie, come sell your fiddle,
And buy a pint o' wine."
"Whan I to sell my fiddle,
The warl' would think I was mad;
For mony a rantin' time
My fiddle and I hae had."

1. やかまし屋ウィリーは
フィドルを売って
何か買おうと
市に出かけていったとさ
フィドルを手放すと思うと、
涙で目が曇ったとさ
やかまし屋ウィリーよ、
ようこそ おいでなさったなあ

2. ワロカランに立ち寄って
こっそり中をのぞいたら
やかまし屋ウィリーが
あすこのテーブルのはしに坐ってた
楽しい連中といっしょに
あすこのテーブルのはしに坐ってた
やかまし屋のウィリーよ、

3. 「ウィリーよ、フィドルを売ってくれよ、
冴えた音素のフィドルをよう、
1パイントのワインと交換に
さあ そのフィドルを売ってくれよう」
「俺がフィドルを売った日にや
俺とフィドルが過ごした
騒々しい日々のおかげで
世の中 おれの気狂ったと思うだろう」



(5ページよりうづく)

くAnnan川)に見られる2~3のパラド的様式について。①因果関係の欠如

パラドは元来、大変素朴な客観的叙事詩で主観部は人間普遍の感情のみで構成され、複雑な「特定人の日記」的要素は極力斥けられています。文字になる前にあれほどの伝承能力を示したのもそのためですが、広く一般に認められる真理(虚偽、迷信を含めて)を歌ったものほどその残存力は強いのです。このパラドについて見ても、「なぜ対岸に恋人がいたのか」「なぜその夜、川を渡らねばならなかったのか」「船賃しはなぜ船を出さなかったのか」等々の複雑な因果関係は当然の如く無視されています。もっともチャイルド・パラドの4連のうち、ニック・ジョーンズが省いた9連目には船賃の次のような返答があります—美しいスコットランドの全ての黄金にかけて、私は昨夜おそく誓いを立てたのだ、お前をアニーのもとへ連れては行かぬと、一度きりじゃなく何度もな。—しかし、なぜそのような誓いを立てなければならなかったのか、依然として説明されていません。

②話者の不一致について

ニック・ジョーンズのバージョンを話者別に見てみますと、1~2連=主人公、男、3~6連=第三者(客者)、7連=主人公、8~12=客者、と話者が度々入れ替わる事に気が付かれます。[チャイルド・パラドによる14連に於ては、更に主人公の恋人(女)と船賃がこれに加わり、実に1つのパラドが4人の話者によって構成されています。]これにはいろいろな理由が考えられます。一つには、伝承効果を高めるために、原則として歌い手が自身の主観を控えることが望ましいので、多くのパラドに於ては、必要に迫られた場合、主観的詩句を一時的に登場人物に委ねるといった方法がとられているからなのです。もちろん最初から意図してそうなったのではなく、そのような性質を備えたパラドがより多く残存し、又、そのように変えられて来たのでしょう。

同テーマのパラドとしては、私の知っている範囲では、Robin & Barry Dransfieldの“Water of Tyne”(The Rout of the Blues <LER-2011>)があります。(東野 和子)

オーク 音楽と本の店

ブライク・ホークをやめられた松平維秋氏が現在勤められているお店。偶然にも、我紙と同名で、かの有名なアメリカの出版社、オーク出版の直営店です。今はまだアメリカものが多いいのですが、これからはパラド関係の本やレコードがはいる予定です。右に挙げたものは、3月中旬までに入荷する予定の楽譜集で、※以下はすでにはいています。

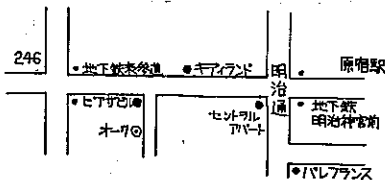
なお、松平氏は2時以降お店にいらっします。みんな遊びに行きましょう。

営業時間 10:10a.m~7:00p.m

日曜定休日

東京都渋谷区神宮前4-26-22

TEL. 03(470)5063



- IAN CAMPBELL FOLK GROUP SONG BOOK
- DUBLINERS SONG BOOK
- FAIRPORT CONVENTION ON TOUR
- JOHN RENBORNE GUITAR PIECES Book 1
- " " Book 2
- ASHLEY HUTCHINGS A LITTLE MUSIC
- LIVERPOOL LULLABIES
- SEED OF LOVE
- VICTORIAN FOLK SONGS
- SONGS OF SCOTLAND
- SONGS OF PLANXTY
- STEELE SPAN FIRST ALBUM
- " SECOND ALBUM

- ※ THE CONCERTINA
- ENGLISH CONCERTINA
- THE PENNY WHISTLES
- O'NEIL'S MUSIC OF IRLAND
- FOLK MUSIC SOURCE BOOK
- &
- ENGLISH, WELSH, SCOTTISH & IRISH
- FIDDLE TUNES
- Robin williamson

NEWALBUMS

THE WOODS BAND "The Woods Band" (CREST 29)

1月のトラッド愛好会の例会でもアイリッシュ・フォーク・シーンの特集が組まれていたが、このところブラス・ロックでもアイルランドからの入庫が次々続いてきている。これらのレコードにより、今までポシ・バンドやライアム・ウェルドンらによって個別に知られるのみだったアイリッシュ・フォーク・シーンの全容がしだいに明らかになっていくと思うのだが、あえて独断を恐れずに言うと、発売されているレコードの数やミュージシャンの数で伝わってくる現象面での活況に比べて、個々の作品はいかにも“2流のイギリスとしてのアイルランド”とでも言うべき脆弱さを露呈しているような気がする。無名のバンドの多くがブラス・ロック・ポシ・バンド路線のフォロワーであることから、あらためてアイルランドに於けるポシ・バンドの重要性を確認し、また松平氏によるライアム・ウェルドンを評しての“超アイルランド的歌唱”という表現の意味をばくばりに理解させてもらった、というような具合だ。

さて、ニュー・アルバムというにはいささか古くなるのだが、今回ここで取りあげようと思うウッズ・バンド、そのゲイ&テリー・ウッズ夫妻もアイルランドの出身である。現在は全英的なレベルで独自のフォーク・ロックを追求している彼等もまた、かつてはアイルランドの地に於いて地道な活動を続けるフォーク・ミュージシャンだったというわけだ。昨年の春に再発になったテリー・ウッズ、アンティ・アウヴァイン、ジョニ・モニハンによるアコースティック・トリオ、“スウィーニズ・メン”のレコードに聞かれる如く、彼等のトラッドへのアプローチは60年代の後半に既に一定の水準を獲得していて、彼等の活躍が現在のアイリッシュ・シーンの興隆の布石になったということは想像に難くない。

ウッズ夫妻はその後イギリスに渡り、スティーライ・スパンの結成に加わるわけだが、わずか半年でスティーライを脱退し(この間に残したのが“ハーグ!ザ・ヴィレッジ・ウェイト”)、その直後にこの“ザ・ウッズ・バンド”を吹き込んだものらしい。このアルバム全体から受ける印象は、スウィーニズ・メンをエレキトリックなレベルでより動的に展開したという感じで、後の“ゲイ&テリー・ウッズ”としての3枚のアルバムでは希薄な、いかにもアイルランド的なリリカルな香りをたたえているのが興味深い。ギター、ベースを担当しているエド・ディーン、ドラムスを担当しているパット・ナッシュはいずれも無名のミュージシャンだが、推測するに彼等もまたアイルランドの出身ではないかと思う。

しかしこのレコードの魅力は、そのようなアイルランド的芳香やロック・サウンドといった表面上の粉飾にあるのではないだろう。かつてフェアポートやスティーライがトラッドのロック的展開を模索するという音楽的情况にあって、彼等もまた自らに固有な音楽を求め、自らの血に潜むトラディショナルなものと時代の音楽としてのロックの影響との確執を、身をもって経験したに違いない。それらは単なる表面上の融合として語られるべきものではなく、より内面的な音楽への執着のうちに彼等が必然的に身にまとったものと言えるだろう。ここに当時の混沌とした音楽情況の生々しい断面を見る思いがするのは、かつて“プリティッシュ・フォーク”と呼ばれた音楽を愛したもののノスタルジーなのだろうか。とにかく、この“ザ・ウッズ・バンド”は、アルバムとしての完成度といったものをこえて、ぼくを魅了した、最近では希少なレコードの1つだった。

(木下 明俊)

THE JOHN RENBOURN GROUP "a Maid in Bedlam"

(Transatlantic TRA 348)

ジョン・レンボーンが4年以上もの“隠遁”から戻って来たのは76年暮の事でした。その復帰第一作“The Hermit”は全編ギター・インストでしたがリリカルな作品が中心で、恐ろしい程精緻になったプレイにも増して落ち着いた深い味わいや音楽家として一段とスケールの大きくなった事が印象的でした。そして半年後に発表されたのがこのアルバムという訳です

が、ここでは以前から彼と親しかった人々、J・マクシー、S・ドラハイム、T・ロバーツ、K・サテとのち人で、あくまで彼のソロ・アルバムとしてではなく、グループとして緻密に組み立てられた音楽が聴かれます。10曲中、3曲を除いてトラッドで、基本的には“The Lady and The Unicorn”の発展と言えるでしょうが、ここでは何よりもコーラスが特徴的で、ロバ

ワの重厚バリトンとマクシー&ドラハイムの清純なハーモニーが見事な効果を上げ、ジョンは控え目にバックアップする役にまわっている様です。あのペンタングルと比較すると神経質に張り詰めたインタープレイに代わって“快活さ”“明るさ”に満ちていると言えます。そしてフィドルと管楽器が活躍する為、音楽は極めてメロディアスに流れ、全体としてバラッドがここまで健康的で聴き易くて良いのかとさえ思う程ですが、軽快であっても決して軽薄では無いし、彼らにとっては昔からバラッドも自分達の音楽を造る上での一素材であって、聴き手も彼ら自身の音楽を楽しむばそれだけで良いわけです。

ジョンはこれと似たメンバーと共に過去に未発展に終わった作品を残しており、またコンサートを開いた事もあった様で、そうした彼の長年の努力はここに見

事に開花したと言えるでしょう。彼の音楽歴から考えてこの音楽が唯一の方向では無いにしても彼が満足しているだろう事は演奏に凝れた“喜び”から十分感じられましょう。ともあれ、このグループがパーマネントなものとして活動を続け、ユニークなトラッド・グループというより、プリティッシュ・フォークの一つとして独自の音楽を更に深化させて行っで欲しいものです。

なお、タイトルの曲はスティーライが2作目で採り上げたパドラム精神病院の前身の修道院にまつわるバラッドだと思います。

また、ジョン・レンパーンは5月に、ステファン・グロスマンと共に来日します。デュオのアルバムも出る予定です。

(白石 和良)



NEW ALBUMS LIST

(これらのレコードは、オパス1に、1月から2月中旬までに新譜として入荷したレコードです。)

- | | | |
|-------------------------------------|--|------------------------|
| * DAVE & TONI ARTHUR | " SING A STORY " | Decca SPA 509 |
| * PETER BELLAMY., M.CARTHY | " THE TRANSPORTS " | Free Reed FRRD 021/022 |
| * AILEACH | | EMI LEAF 7009 |
| * JACKIE DALY | MUSIC FROM SLIABH LUACHRO VOL. 6 | TOPIC 12TS 358 |
| * THE BLACKSMITH | MERRILY KISSED THE QUAKER | EMI ISLE 3010 |
| * THE BLACKSMITH | 2 | EMI STAL 1048 |
| * ROBIN DRANSFIELD ETC. | THE TALE OF ALE | FREE REED FRRD 023-024 |
| * EDDIE & FINBAR FUREY | I KNOW WHERE I'M GOING | EMI ISLE 3006 |
| * WOLFE TONES | 'TILL IRELAND A NATION' | DOLPHIN DOL 1006 |
| * WOLFE TONES | REFLES OF THE I.R.A. | DOLPHIN DOL 1002 |
| * WOLFE TONES | 'LET THE PEOPLE SING' | DOLPHIN DOL 1004 |
| * TONY HALL | FIELDVOLE MUSIC | FREE REED FRR 012 |
| * MIDNIGHT WELL | | MULLIGAN LUN 011 |
| * MICK HANLY | A KISS IN THE MORNING EARLY | MULLIGAN LUN 005 |
| * ANDREW CRONSHAW | EARTHED IN CLOUD VALLEY | TRAILER LER 2104 |
| * WOLFE TONES | ACROSS THE BROAD ATLANTIC | TRISKEL TRL 1002 |
| * WOLFE TONES | IRISH TO THE CORE | TRISKEL TRL 1001 |
| * WOLFE TONES | TEDDY BEA'S HEAD | DOLPHIN DOLM 5005 |
| * BARLEYCORN | THE WINDS ARE SINGING FREEDOM | DOLPHIN DOLM 5011 |
| * THE DRONES AND THE CHANTERS | IRISH PIPERING | CLADDAGH CC 13 |
| * KATHLEEN COLLINS | | SHANACHIE 29002 |
| * WOLFE TONES | UP THE REBELS | DOLPHIN DOLM 5003 |
| * JOHN VESEY & PAUL BRADY | THE FIRST MONTH OF SPRING | SHANACHIE 29006 |
| * NIC JONES, MARTIN CARMY ETC | FYIDE ACOUSTIC | TRAILER LER 2105 |
| * CRUBEEN | EAGLE'S WHISTLE | EMI LEAF 7011 |
| * THE CREHAN FAMILY & CARL CORCORAN | THE CREEN HILLS OF CLARE | EMI ISLE 3003 |
| * PACKIE DUIGNAN & SEAMUS HORAN | MUSIC FROM COUNTRY LEITRIM | TOPIC 12TS 339 |
| * TOMMY HEALY & JOHNNY DUFFY | MEMORIES OF SLIGO | TOPIC 12TS 335 |
| * HUGH GILLESPIE | CLASSIC RECORDINGS OF IRISH TRADITIONAL FIDDLE MUSIC | TOPIC 12T 364 |
| * JOHN DOONAN | AT THE FEIS | TOPIC 12TS 368 |
| * ANGUS GRANT | HIGHLAND FIDDLE | TOPIC 12TS 347 |
| * MALICORNE | ALMANACH | WEA 88300? |
| * THE HIGH LEVEL RANTERS | THE BONNY PIT LADDIE | TOPIC 2 12TS 271 |

(協力 オパス1)

B.T.A.S. NEWS

・12月の定例会はクリスマス・イヴということで、12月24日(土)の夜から行なわれました。会員によるダルシマー、フルート、ギター、フィドル、ホウィッスル、バグ・パイプ等の演奏が行なわれ、特に日頃見ることのできない楽器には注目が集まったようです。

・1月22日の定例会は、アイリッシュ特集と題して、ポスィ・バンド系のバンドの歴史をたどってみました。現在のアイリッシュ・レコードの量の多さには驚ろかされますが、その中でもこの流れは非常に重要です。2時間という短い時間ですべてのバンドの紹介は多少無理があったかもしれませんが、松平氏の適確な解説と、資料によって十分意義のある会になったと思えます。

この日のために製作された "Irish Scene" (系図と Discography) を150円 (送料込み) でお分けいたします。希望される方は当会まで。

・今まで定例会は、毎月第4日曜日でしたが、まちがえやすいということで、最終日曜日に変更させていただきます。

・OAK-No.1から読誦されている方は、この号で、500円(3号分)が切れますので、継続される方は500円をお送りください。



・編集後記——森氏に代わって今回から編集をすることになりました。今回は2ページ増やして10ページの増刊ということで、スタッフ一同がんばりました。なれないために、編集に不備があるかと存じますが、どうか御容赦下さい。(薙 仁)

"ブリティッシュ・トラッド"愛好会 British Trad Appreciation Society (B.T.A.S)

会 長—松平維秋

顧 問—東野和子

運営委員—森 能文、遠藤斗志世、白石和良、
薙 仁、

協 力—大山 聡、大河内優子、前田雅一郎、木下明俊
ブラッリ・ホーク、オパスI etc.

連絡先—〒150 東京都 渋谷区 道玄坂 2-18-3
ブラッリ・ホーク内

"ブリティッシュ・トラッド"愛好会

定例会

- ・毎月最終日曜日
- ・12:00 AM ~ 2:00 PM (11:00 AMから来店可能)
- ・場所: ブラッリ・ホーク

"OAK—British Trad Review" No.3

発行人—ブリティッシュ・トラッド愛好会

編集人—薙 仁

版下製作—薙 仁

1978年2月26日発行

© <無断転載を禁ず>

定価100円

OAK—British Trad Review is published
bi-monthly by British Trad Appreciation
Society % Black Hawk 2-18-3
Dogenzaka Shibuya-ku Tokyo, Japan